

だいじょうぶだよ おじいさん

「行ってきます。」
たくやは大好きなスイミングスクールに行くために、家を飛び出しました。



（どうしよう。おそくなっちゃったぞ。いそがないと……。）

たくやが楽しみにしている水泳大会まで、あと一週間。一位をめざしているたくやにとっては、とても大切な練習時間です。コーチにも、いつもより早く練習にくるようになんと言われていたので、たくやはおくれたくない気持ちでいっぱいでした。

（あついなあ。）

照りつける真夏の太陽の中を、汗を流しながら走るたくやは、大和ミュージアムのそばを通りかかりました。たくやが走る目の前をふらふらと歩くおじいさんがいました。その時です。

（あぶないぞ。）
と思ったしゅんかん、おじいさんは、急にたおれてしまいました。

おじいさんは、汗びつしよりで顔もまっかになり、息をするのもつらそうでした。

「おじいさんだいじょうぶですか。」

たくやが声をかけても、おじいさんはこたえることができませんでした。まわりには、たくやのほかになれもいません。たくやはどうしていいかわからず、ただおろおろするだけでした。そのうちに、おじいさんはますます苦しそうな顔になっていきました。

たくやは、急に立ち上がり、あたりを見わたしました。そして、大和ミュージアムの警備員を見つけると、急い



でかけこみました。

「おじいさんが、たおれています。助けてください。」

たくやの声にびっくりした警備員さんは、すぐにおじいさんのところにかけつけてくれました。

「だいじょうぶですか。おじいさん。」

こたえられないおじいさんを見て、警備員さんは、すぐに救急車をよんでくれました。

今年の夏は、いつもの年より分あつく、熱中症ねつちゆうしやうになる人もたくさん出ていました。おじいさんも多分熱中症だろうと警備員さんがおっしゃっていました。熱中症で死んでしまうこともあると聞いていたので、よけい心配になりました。

（おじいさん、だいじょうぶだろうか……。）

たくやは、スイミングスクールのことが気になりながらもおじいさんのことが心配で、その場をはなれることができませんでした。

しばらくすると、救急車が来ました。

救急隊員の方が、おじいさんに話しかけながら、救急車におじいさんに乗せました。

その時、ぐったりしていたおじいさんがぼくのほうを見て、

「ありがとう……、ありがとう……。」

と、かすかに聞こえる声で言いました。おじいさんは、苦しそうな様子でしたが、少しほほ笑んでいたようにも見えました。

「心配しなくても、もうおじいさんはだいじょうぶだよ。

君が助けをよんでくれたおかげだ。ありがとう。」

救急隊員の方の言葉を聞いて、たくやはほっと胸をなでおろしました。

おじいさんに乗せた救急車は、サイレンをならしながら病院に向かいました。そのサイレンの音を聞きながら、スイミングスクールに向けて走るたくやの表情は、とても晴れやかでした。